巻頭言

市立甲府病院呼吸器内科
西川圭一

2011年は東日本大震災とそれに続く東京電力福島第一原発事故という我が国の歴史上未曾有の大惨事に大きく揺れた1年であり、これに関連する膨大な問題の解決に、はたしてどれほどの時間と労力を要するのか想像すらできませんが、ひとりの医療者として日々の役割を確実に実行することで、たとえ間接的にでも被災した多くの皆様にわずかでも貢献していきたいと考えています。

さて、本誌は今回で記念すべき25号となり創刊より四半世紀を迎えました。山梨県内でも有数の歴史ある医学誌として広く認知されるに至り、これはひとえにこれまで本会を運営されてきた諸先輩、事務局の皆様、熱心に参加されてきた会員の皆様の熱意とご尽力の成果であり、この場で改めて敬意を表するとともに、今後のさらなる継続・発展に個人的にも微力ながら貢献していく所存でおります。

今回のテーマは“肺がんの化学療法”とし、これに関する4演題のご発表をいただきました。また日本医科大学付属病院、久保田馨先生には『肺がん化学療法 –治療選択に関する意思決定支援–』というタイトルで極めて示唆に富んだ、久保田先生ならではの切り口で特別講演をいただきました。思えば本会が発足した25年前はシスプラチンが発売されてまだ間もない時期でしたが、この薬剤がいまだに肺がん治療のkey drugとして、その輝きを失っていないという事実は大きな驚きであり、と同時に肺がんの化学療法がいかに難しいかを物語るものといえるでしょう。その一方で10年前のゲフィチニブの登場、そしてその後のEGFR遺伝子mutationの発見は肺がん治療の個別化がいよいよ現実的になった例であり、VEGFに対する抗体医薬品をはじめとした分子標的治療薬の開発、実用化、さらには今後のワクチン療法等々、肺がんの“内科的”治療も着実に進化していることは間違いありません。しかしながら特に化学療法の領域においては、依然として満足すべき治療成績からは程遠いのが現状であり、当然のこととして肺がんの最大の原因である喫煙の抑制、二次予防としての早期発見への努力が重要であることは言うまでもありません。

久保田先生はご講演の中で、治癒なのか、延命なのか、あるいは緩和なのか、個々の患者さんにおける治療の目的を明確にし、それを意識した一人一人の患者さんにとってのbestな治療方針の計画、実行が重要であることを強調されていました。ともすれば必ずしも本質ではない目先の腫瘍の縮小に踊らされて、結局は患者さんの利益とは離れた治療に陥っていないか、自分自身を含めて改めて検証する必要を痛感した次第です。

肺がんが、がん死亡の第1位を占めるという不名誉な現状を一刻も早く解消するために、我々会員の力を結集することで、山梨県の肺がん診療のさらなるレベルアップが図られることを願ってやみません。